

繪本通俗三國志

七編六



122  
74

東 京 圖 書 館

和 書 門

小 說 類

~~三 六~~ 函

~~七 八~~ 架

七 五 冊

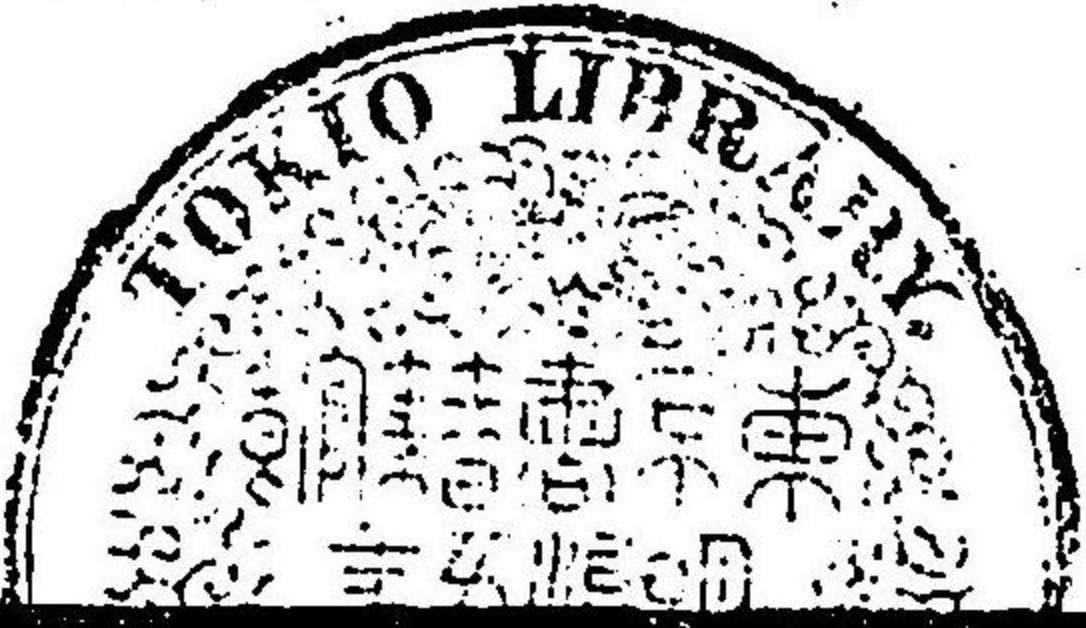
七 五 冊

繪 本 通 俗 三 國 志

七 編

六





繪本通俗三國志七篇表之六

目錄 明治十年交換

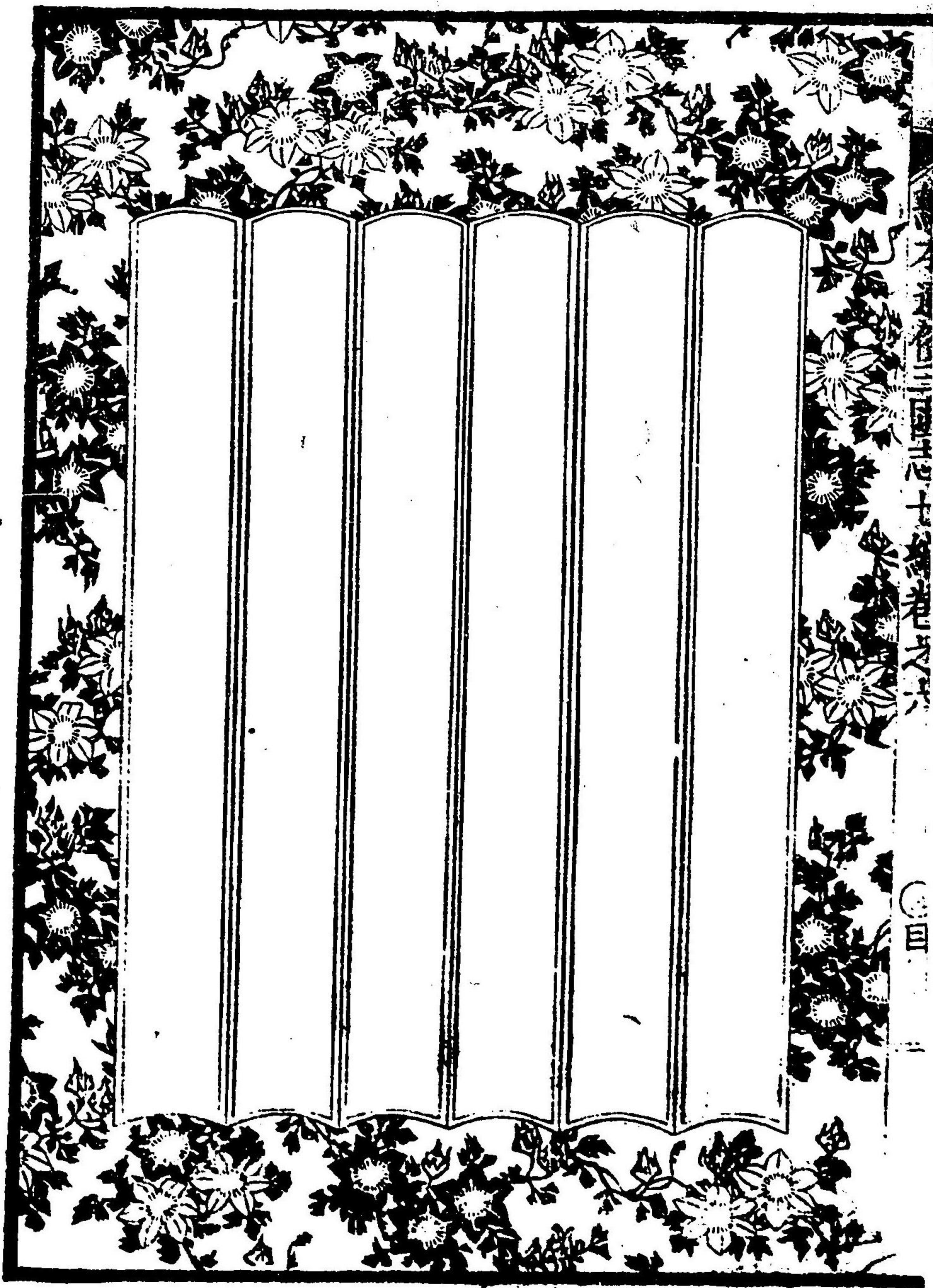
魏折長安美露盤

仲達與兵定遼東

仲達謀殺曹爽

Handwritten notes in Japanese characters, including '冊二七三' and '三三〇'.





繪本通俗三國志七編卷之六

魏折長安兼露盤

後主劉禪。とては孔明を葬りて。朝廷より入りし近臣  
 奏して。ける。只今辺官早馬を打て。呉の大將全琮。騎  
 の勢を調く。巴丘へ生とりと告来たり。後主は之を聞て色を  
 失ひ。丞相近比亡びたる。呉より。盪背して攻来らば如何  
 せん。と宣へば。蔣琬が曰く。臣はがくち王平張疑水も。敢不  
 の勢を引て。永安城を守らん。陛下一人の使を呉に遣し。丞相  
 の表を告て。そのんを伺へし。人。後主は之を遣ひ。魏へ使  
 せんと宣へば。一人を遣ひ。出でて曰く。臣不才なり。と。し。後へ  
 へ。呉に使せん。此乃ち南陽安衆の人。參軍右中郎宗預。字を



徳薨ちり。蔣琬の人心くんと。奏しければ後主詔を下して。吳に遣さる。宗預直に吳の金陵に到り。礼を施して。孫権が左右をてゐる。近侍の人心く喪の服を披たり。孫権はける。吳と蜀と一家の交する。御辺に君あり。永安城の守の勢を添たる。宗預が曰く。臣あり。東へ巴丘の守を添。西へ永安の勢を増事の勢ひを自然り。何ぞさる。昔日の鄧芝の心。孫権笑ひて曰く。此人も真の俊傑なり。昔日の鄧芝も方をして。近くおして。ける。朕あら。孔明が亡びたる。て。毎日涙を流し。諸葛瑾が一族に孝を掛て。祭をさし。ち左右のやのまでも。尽く喪を發せし。方一魏の勢をの蔽。の。蜀を攻んと。と。巴丘に勢を添。守らし。む。同

盟の好での。宗預頓首して曰く。我國の天子孔明が。あら。亡び。臣に命じて。喪を陛下に。いよく好む。孫権を折く。誓を。朕を。交をむ。上の安ん。義を背く。理あら。若。誓を。背。朕が子孫。天の罰を被らんと。香帛。禮物。具別。使。て。喪を。吊。宗預。成都。後主。奏。して。ける。吳主。孫権。孔明。あら。亡び。由。て。自ら。涙。を。あ。諸葛瑾。亦。孝。を。け。祭。を。さ。魏の勢の虚。蜀を攻んと。と。巴丘。成。を。て。我國を援く。いよく同盟の交をむ。ん。為。是。別。使。を。喪。を。吊。後主。喜。吳の使。を。







く持成て回りし宗預をあめく賞して。其後孔明が遺言を任せく蔣琬を丞相大將軍。録尚書事と費禕を尚書令として。同く丞相の事と理させ。吳懿を車騎將軍とし。節を假く漢中を守らし。姜維を輔漢將軍平襄侯とし。諸本の軍馬を総く漢中に出く。魏の勢をふせ。かせ其餘諸將尽く封賞ありけり。揚儀は已に妻用す。れざるを恨んで孔明五丈原まじびとる。我も。諸軍を率て魏を降らば。箇程さびりま目へ。あまどさるものこと云ひ。る。近臣さるとて。密奏しければ。後主いざ。蔣琬をやして。蔣琬の蔣琬が曰く。揚儀はたふ。魏延と孔明と説くと。魏延はと。よ。う。て。已。と。と。い。る。む。と。と。謀。及。せ。り。是。諸。人。の。別。は

ある。おちり。今又浩る言を吐出をも。必を國の禍をあさる。後主いよく怒り。獄を下して斬く。捨よと宣へば。蔣琬が曰く。揚儀は罪あり。とせども。久く孔明は従く。功勞あり。是を殺とも。志のびぐ。只官職を削く。百姓とあし。後主はこれ。よ。ま。ご。が。命。を。う。り。を。助。け。く。漢。中。の。嘉。郡。を。従。し。ひ。け。れ。ば。揚。儀。を。着。く。自。ら。首。を。刎。く。失。え。け。り。是。より。國。中。大。に。治。り。姜。維。兵。糧。を。貯。く。二十。年。の。計。を。あ。ひ。乃。ち。蜀。の。建。興。十。三。年。ち。り。時。は。魏。の。青。龍。三。年。魏。主。曹。叡。は。孔。明。を。ど。う。死。し。て。吳。蜀。を。兵。で。起。さ。す。國。中。を。あ。へ。ど。靜。ち。り。け。れ。た。司。馬。懿。を。太。尉。に。封。じ。て。各。所。の。軍。馬。を。總。督。と。せ。自。ら。許。昌。に。あ。り。て。ま。び。さ。し。く。材。木。を。あ。め。く。多。く。宮。殿。を。立。く。三。年。を。経



よく成就して又洛陽の朝陽殿太極殿總章觀を築き俱  
又高き十余丈あり。又崇華殿青霄閣鳳凰樓九龍池を  
造り博士馬均といひものて奉行として財用の費を厭へ  
む華麗を極く金玉を鑲め雕梁華棟碧瓦金磚錦繡  
重くとして光彩日輝く。天下の巧匠三万余人。人夫三十  
余万を扱んで晝夜を分かたず是を作らせ若し便をば  
とあるとたへ公卿大夫士と荷いせ石をせまへりめけは萬  
人の哭まじと死は司徒董尋表て上りて諫めければ曹  
叡怒りて汝死を怖とざるくといふ近臣を法よ於て斬  
て奔べると云ければ曹叡曰く朕もとより董尋が中心義  
と志あるは殺せよ志のひび官職を剥ぐ百姓とは重んじて

諫るものありは首を斬んとて即時董尋が官を剥ぐ  
馬均とてちりてやりける。朕が建る高臺峻閣へ仙人と往来  
し。長生不老の術を求めんとあめを汝が意へらん馬均が  
曰く陛下ひう漢の武帝の建ゆひ。柏梁臺の事とま  
ゆひや曹叡が曰く朕のまこと詳よまらば汝さるるま  
と詰り馬均が曰く漢朝二十四代の内へ武帝の國を保  
ゆひと最久しく壽も亦高し。天上日精月華の気を  
服し。長安の宮中へ一の臺を造り。柏梁臺と名く上  
銅人を造りて手二一の盤をさげ之を承露盤と号し。三  
更の時分は北斗の降せる沆瀣の水を承く。天漿を  
又甘露とも名付美玉を屑とす。調く之を服せると



自然と老たるも童とよみて百病を除くとや傳ふ。曹  
叡大に喜び汝行ぐ美露盤ととり来ると。二万の人夫  
て馬均と共に長安へ遣しける。馬均夜を日と繼ぐをせ下り。  
柏梁臺の四方に材木を組上ぐ梯と繩を張て上り升り。  
五千の人夫を先銅人と金盤とを取下させんとせむべし。  
まぢ銅人潜然として涙をながし。詔人とあるあやむいふ。  
俄に一陣の狂風吹起り。沙を飛し石を走らし。其列は  
下り急雨の如く。何ともあらず。曉く音のきき入けるが天も崩れ  
地も裂がごとく。其ひき四方にまきまきで銅の十田よあまざる。圓  
柱一度倒れて高き二十余丈の臺とぐく崩れ人夫千余  
人押し打きて失ふけり。馬均もあまも怖れを火を付く臺を

焼せ。銅人金盤を取て洛陽へ上り右のあやむいと若けれ  
曹叡が曰く。銅の柱は何よりあつ。馬均が曰く。まお重し。百万斤  
みしてあつ。動くはとせ。曹叡又大駭を遣し。銅の柱を  
打碎いて。洛陽へをまをせ。是をのりて銅人を二の造り。公孫仲と  
号して。司馬門外に立させ。又銅の龍鳳を造り。龍の高き四丈  
みして。鳳凰の三丈あり。まお是を殿前へ立せ。上林苑の内  
の奇花異木をびびく。あつ。珍禽怪獸をや。あひ。又美女千  
余人ををせらび集く。其費を百姓の嘆とあやむ。少傅楊  
阜表せ上ぐ。まおを諫む。曹叡怒りて。表奏を打破り。武士  
命じて。楊阜を門外へ打出させ。自ら馬ののりて。上林苑へ入  
ると。太子舎人張茂。字は彦林。といふもの。髪を乱し。身



紙錢をうけけり。地は跪き表を上りければ曹叡ひらきこる。  
 又諫むる初よりいへば勃然として色を変じ張茂を  
 只中書令ちり。何とて狂言を生じて朕を誘ふとて。武士  
 命じて首を斬りかければ張茂大に叫んで曰く無道叡  
 君早晚なららば敵の擒とあらんと罵りて卒に首をぞ  
 斬りける。曹叡その首を百官に志せし。又馬均に命じて孫  
 高基銅人を造らせ。禁裡の擗み。大なる鼎をさきて油を日く  
 沸えらせ。若し諫むるものあらば烹殺さんとぞ解たりける。  
 百官の事を怖きと司馬懿に告げし。司馬懿曰く魏の  
 運已に尽たりの必も諫むるとあられ之よりして諫るもの一人  
 もありけり。時、青龍五年改めて景初元年とす。皇后

毛氏もと河内の人なり。初、曹叡のまご位に即位を平原王  
 たりしと其甚ど毛氏を愛して出入常々輦と同くせし  
 帝位に即位す。皇后は具へける。其後郭夫人を寵愛  
 して毛皇后の目とどむ向む。日夜郭夫人と集り耽り。  
 常々月を経ても宮を出ず。是歳の三月上林苑の内、百花  
 めいそひ開けて。春風真を催しけし。曹叡郭夫人と遊  
 びて。華萼樓に酒宴を設く。郭夫人問て曰く。天子  
 ちんぞ毛皇后をせしむ。共々花をえのへざる。曹叡曰く。若  
 毛皇后と一目をみれば朕一滴の水も喉に入らずと得ずとて宮  
 女に命じて四方を守らせ。毛皇后と其の出入寄ることある。  
 朕はるしとてちんをせしめて。郭夫人と遊ばける。毛皇后は二月



本場長  
安又赴  
ひき  
拍梁臺  
七やく



本場長



あまきども曹叡が来らざるやあ争し此日十余人の宮女を  
ともあひ翠花樓の辺に生く。んと慰むけけるが遙々音楽  
の色を聞く。さると何の樂ぞと問ふ宮女答てされ天子  
郭夫人と花見せし御遊ありといひけり毛皇后  
の内憂ひ悶へ宮中へ回りと。次の日車に乗る園へ生ける  
が廻廊の辺より曹叡へ生合ひ昨日北園よりの御遊はこそ  
樂深くいへんと云けり曹叡大に怒り武士をせり毛皇  
后を志し殺させ相從宮女を尺く殺して卒に郭夫人を  
皇后と爲とた景初二年春正月長安より早馬きたり幽  
州の刺史母丘儉表て上りて遼東の公孫淵謀反を起して  
つら燕王と称し紹漢と年号を立てる。あびり兵をぬ

め北國を動乱と速に討手を下さむを由り大事を  
あぶんと告げし曹叡大に怒り臣を集り計を  
議す。

仲達兵定遼東

遼東の公孫淵はあち公孫度が孫公孫康が子あり。去  
ぬる建安十二年曹操がつら袁尚と追蒐けし公孫康  
をなち袁尚を斬り首を送上せける。人曹操との恩賞。  
公孫康を襄平侯と封む公孫康二人の子あり。兄を公孫  
晃と云弟を公孫淵と云公孫康死して二人の子をけり  
きよりて公孫康が弟公孫恭との國を保ち曹丕がとれ  
騎將軍襄平侯と封せらる其後太和二年公孫淵とて



長トて。武力人ニ絶ト一々卒ニ公孫恭が位を奪けり。曹  
 叡之とて揚烈將軍遼東の太守ニ封トけり。呉の孫權ニ  
 國の援とせんが為ニ張彌許宴とらめものて使と。金銀  
 と送く好むをむむ孫淵を燕王ニ封む。志うれども魏を怕  
 るのふありけり。呉の使を殺して。その首を魏ニ送る。曹  
 叡之を賞一。大司馬樂浪侯ニ封トけり。公孫淵之を  
 不足ちり。詔將をのめ。謀又て企く。自ら燕王と号  
 して。紹漢と年号と定む。死ニ賈範とらめ。練て曰  
 く。何とて浩る事と企のふぞ。曹叡の贈る官職卑しと  
 のふあら。然ニ謀又て與一のふ。必む大ちり。突て招くん。況  
 や。司馬仲達よく兵を用ひて。孔明ともあ。怖となり。我國の

分トて。争う中國ニ敵とむ。公孫淵大ニ怒り。賈範を  
 縛りて獄ニ下りけり。參軍倫直諫めて中ける。賈範  
 が祠まこと。理の當然ちり。聖人も禍福將至善必先  
 之不善。必先知之と宣へり。我國志づく。ふぎの事あり。  
 君ちんぞ察し。のふ。近ごろ二匹の大あり。あ年。頭巾  
 せ。紅の衣を披て。人の屋入りて往來。是。一。不  
 祥ちり。城南の百姓飯を炊ぎけるが。金の中。二人小兒  
 の。死骸あり。是。二。不祥ちり。襄平の北。市  
 又。俄。大。陷坑出来。内より死人の肉。大  
 さ。二三尺五体へ。の。備り。却。手足。往來。人  
 切。射。更。透。何。あ。人。知。







東を守りて次又襄平を守ると安んず臣が度るある生  
 人曹叡が曰く卿いぬ遼東へ下らば何日の日都へ回らん  
 司馬懿が曰く四千里の路をれば百日の國に到り攻  
 百日回ると百日休息するに六十日以上のとくあるとたへ前  
 後一年の内への事治むらん曹叡が曰く若吳蜀より攻  
 来らば如何せん司馬懿が曰く臣とて吳蜀を拒の計を  
 定め置り陛下ありも憂ひのし曹叡大に喜びければ  
 司馬懿のらくの大将を伴ひ胡遵を先手の大将として  
 直に遼東へ下りけり公孫淵の由をすく卑衍楊祚を八  
 万余騎を授け遼隧に打て出て周二十余里に陣屋を作り  
 壕を深し鹿角まびく結り守らむ先陣の大將胡遵

この体をとての司馬懿は報つけられ司馬懿笑ひて曰  
 され戦へむと密く守り寄手を老さん為の計あり今  
 若攻へ敵の計に中らん推量するに遼東の勢大半是  
 ら守りたるらん然とたへ其巢をあらば空虚あるべし  
 是のちを打奔る直に襄平に攻むらば敵もあらば来  
 救んそのとた半途に伏し是を破らば十分打勝べし  
 て尽く襄平とて進発を遼東の大將卑衍まびく  
 守る生ざりけるが楊祚をわけてけらる魏の勢なれ攻  
 来るとも我ホあらば戦へくらば彼もさぐると四千里の路  
 きたたり人多くと糧足も我ホ固く守りて月日を送る  
 兵糧忽ち尽きて自ら乱れ去んぞとた追打



せむ尽く滅ぶ。昔司馬懿渭水の陣を固く出て戦ふ  
 ころくべ孔明果して兵糧尽て亡びく。今日よく此理を  
 合り我い又司馬懿を生捉く。孔明が為又仇を報せんを  
 て弥固くまびく守るゝ斥候の兵走り来り寄手乃  
 勢まのふを打奔く山路より南をさして進んだりと告  
 げし。早行をどろひて曰く彼をて味方襄平の虚ちるを  
 志りて此を打きて却る後へ回りの襄平を破らるべ  
 べ我ホ一日も生るとあといも早く行く救んとて陣屋を  
 収めて打立け。又司馬懿へ善く千余人の兵を土民の志  
 く出立せゝく。残り止めて敵の様子を伺へせける。遼  
 東の勢陣屋を収めて襄平を救と告げし。又司馬懿あ

ざ突つて曰く我計を出生む。夏彦覇夏彦威二人は清水の辺に  
 伏す。此のごく計を用ひよと下知しければ二人計を受けて出  
 むけり。案のごく遼東の勢。襄平を救んとて清水の辺まで  
 来ければ忽然として鉄砲ひきき鼓を打哄て造く。魏の伏兵  
 尽く起り。左に夏彦覇右に夏彦威のまをひのめて討て  
 る。又早行楊祚大をどろき一支も支む。襄平をさして走り  
 ければ又向より司馬懿みづから討て出三方より圍ければ  
 遼東の勢討つもの板を志らば降るもの大半も及べり。早  
 行楊祚へ命をさして。這に圍を首山の麓まで走ける  
 不。又公孫淵大勢を引くをせ来りければ一手もあつて敵を待  
 不。魏の勢続く追蒐し。早行馬を生して大音あげ。汝亦







魏の逆賊の心ありの計を休く。分明に勝負と決せよと。さ  
りけり。魏の陣より夏侯霸馬をせし出。戦二三合  
して一刃を斬り落さ。遼東の勢をどろま指さく。色もま立  
たる。とて。魏の勢を喚く。蒐たり。公孫淵まき。乱  
る。襄平の城は外籠る。魏の勢四方を囲んで。日夜攻む。ど  
も要害堅固。より。更に落さ。時秋の半。い。霖雨一  
月。あり。平地水深。三尺。の故。兵糧を運ぶ。舟  
も。遼河より直に城下まで来る。魏の勢も水中。あり  
て。患ひ。苦む。ざる。の。戦。心。あ。り。都督裴景と云  
ゆ。の。司馬懿。告ぐ。や。ける。大雨。く。降。続。く。陣中。又  
お泥の中。又。居。る。前。なる。山。陣。を。移。して。ま。づ。く。晴

て待。司馬懿。い。て。曰。く。我。れ。を。ま。る。や。公孫  
淵。を。生。捉。し。目。の。前。に。あり。安。ん。で。今。陣。を。移。さ。ん。必。を  
無。用。と。る。舌。を。揺。り。て。諸。軍。の。心。を。迷。へ。む。る。と。あ。り。重  
て。陣。を。移。さ。ん。と。い。ふ。や。の。あ。ら。ん。必。を。首。を。斬。り。解。た。り  
ける。その。ち。右。都。督。仇。連。ま。たり。味。方。の。軍。勢。水。を。患。ひ。て  
みる。陣。を。移。さ。ん。と。を。願。ひ。い。て。告。げ。よ。司馬懿。然  
と。して。怒。り。て。曰。く。我。已。に。令。を。出。さ。る。や。女。あ。り。と。て。法。を。お  
く。せ。る。ぞ。と。出。し。て。仇。連。を。首。を。刎。れ。門。を。梟。せ。せ。け  
れ。諸。軍。震。怖。と。り。再。び。移。さ。ん。と。い。ふ。の。を。是。れ  
て。司馬懿。南。の。陣。を。二十。里。ま。り。ぞ。け。態。と。ゆ。く。と。攻  
て。城。の。内。乃。者。と。も。皆。外。に。出。て。半。馬。を。牧。柴。薪。を。取。り



けむる司馬陣理とらふとの問てやけらる昔孟達が謀  
 反せしとた上庸の城を攻めし兵を八路に分ち道てい  
 そぎ卒に孟達を生捉り。今味方の勢四方より集  
 千里を来り却るものと攻めし如何なるものぞ願ひ教へ  
 る司馬懿笑ひて曰く汝司馬の官に居りて兵法を志す  
 昔孟達は上庸の城を籠り兵糧一年の貯あり。兵は  
 小勢なり其とた我勢は敵の四倍して却て兵糧は二月の  
 用意もあらず我一月の兵糧をりて敵の一年の兵糧を對  
 せば安んぞ久く戦ふを得ん。四倍の兵をりて敵の小  
 勢を攻べ勝むとのよりとあらず。是故に夜を日と繼ぐ  
 まるる攻させ卒に孟達を擒めせり。今遼東の勢も亦く是

城の指籠り味方の勢をあらはし寡に敵は兵糧を乏しく味方  
 へ兵糧を飽足り此の一日を送るは志なきが故に城の中兵糧を  
 詰り必し南門より走るべし。そのとた勢はのりて之を攻べ  
 勝むとのよりとあらず。我の勢は敵の四倍にして攻させ南の攻  
 りて二十里退けたり。是敵を走らしめん為なり。兵法にも  
 兵者詭道也戦者逆道也善因事変とらふ。敵は兵糧  
 を乏しくし味方の勢は水中にあると持しめて未手  
 を束く降人を出さず我の勢は無能の事とさして敵の心  
 を安ららしむ。今も小利を貪りて城を攻め敵も亦く命  
 をとて戦ふ。只軍を休め敵の兵糧を詰るは伺ひ。今日  
 の内は天氣も晴れ其とた力を尽して攻破らん。



たりけり。諸將も再拜して。是真に神武の筭ありと感服す。司馬懿も亦ち洛陽へ人を上せし。兵糧を催促しければ。群臣も奏して曰く。近き秋雨降続く一月やまれば。人馬尽く疲れ。苦む早く詔を下して。司馬懿を都へ召回し。曹叡も曰く。司馬懿が兵を用ひて危し。臨んで変を制す。必に深き計ありん。朕近き内よりあらば。公孫淵が首をえり。汝も患る事あり。後々兵糧を下しける。司馬懿へ戦ひを休く。雨の晴を待た。夜日の内。又天気果して晴みけり。其夜外に出ず。天文をみる。二の星。その大さ斗のごとく。光數丈。又流れて首山の東北より。襄平の東南の方へ落ければ。諸人亦大に驚く。司馬懿笑ひ

て曰く。五日の内。よりの星の落たる。亦よくあらば。公孫淵を打取べし。明日力を併せ。一攻せしめよ。とて夜をこめて。明けければ。四方の寄手相逐ひて。哄を造り。山を築く。雲の梯を造り。鉄砲を飛し。石を投げ。地を掘り。攻入ければ。城中の勢も先途と拒ぎければ。兵糧已に尽け。牛馬を殺して。朝夕を送る。斯くは。始終いごとし。義とる不し。結句。城中に野心のありて。常に公孫淵を殺さんと。覷ひければ。日夜心を安んぜざりて。相國王建。御史柳甫二人を。矢倉の上より。繩を以て。城外へ縛下り。魏の陣へ行。降参と望まじ。二人司馬懿の前。再拜し。太尉祢衡の四方の罟を解て。二十里まのどきの人。尽く。城を開て。降らん。とらひ。まの司馬



懿丈又怒り。汝のあまを輕く來りて我を欺くぞとて。引出して二人の首を切。その從者も與く。機文を漆へ回しける。公孫淵の由を文く。いよく駭き自ら機文を披き。よとの文は曰く

魏征西大都督大尉司馬公操下公孫淵切謂楚鄭列國而鄭伯猶肉祖牽羊迎之孤乃天子上公而建南等欲孤解困退舍豈得無礼耶二人老老至傳言失指已被吾斬之若意有未已可便少年有明決者來稍有著遲悉皆誅戮故機

公孫淵は是とてとく怖まよひ。如何せんを殺しけり侍中衛演が曰く。某秘がくへ行ん公孫淵よく云含めて魏の

陣を遣しけり。司馬懿は是とてきて。諸大將を率ふるに出立せし。中軍を排列せし。其後よび入る。衛演膝行肘歩して。帳下を拝伏し。跪ひてやりける。希く大尉雷震の怒を息。兎狼の威を静めて。某ホが降参を拜し。先その子公孫修を生して質とし。君臣を自縛して降参し。司馬懿が曰く。凡そ軍をさるは大法五あり。能戦の戦ひ。戦し能ざるもの守る。守る能ざるもの走る。走ると能ざるもの降る。降ると能ざるもの死す。汝ホ出く降ると能ざるべし。當に死す。我人質を取く何の用よりせん。早く頸を洗く刀を受よとく。遂立く回しけり。衛演頭をくへ鼠の逃るがごとく馳回り。公孫淵は告げし。公孫淵勝と



冷し其子公孫修と千余騎を引具し。其夜の三更南門より出で東南の方へ走りける。敵一人も追ひつゝ安んず行して十里をりし。忽然として山の上は鉄砲ひびき。鼓の音地を動し。一手の勢路を遮り。司馬懿中央に馬を躍せ。司馬師。司馬昭と左右に交戦し。くへく。逃る。と。ぶ。り。け。る。公孫淵。膽を冷し。引回して逃んとする。合圍の火の手をあげて。魏の先鋒胡遵。ま。さ。た。な。討て掛り。左。夏。侯。霸。夏。侯。威。右。張。虎。樂。綝。十。方。より。打。圍。ぐ。鉄。桶。の。ど。く。ち。の。く。く。公孫淵。父子との地を蹴ひて降参して。司馬懿。大。に。笑。ひ。詔。將。を。ひ。つ。て。す。け。る。丙。寅。の。日。此。所。へ。星。落。り。し。が。今。夜。壬。申。に。相。應。せ。り。と。て。卒。に。二。人。の。首。

と勿させ直ち襲平の城に入らんとせられ。先鋒胡遵を以て城を打破り。國中の人民香を焼て出ひ。司馬懿。城。中。へ。入。り。公孫淵。が。一。族。官。僚。七。十。余。人。を。斬。殺。し。擄。と。出。て。民。と。安。ん。ず。賈。範。倫。直。が。公孫淵。を。諫。め。殺。さ。れ。た。る。を。憐。み。二。人。の。墓。を。封。じ。て。其。子。孫。に。恩。賞。し。國。中。已。に。治。へ。兵。を。収。め。洛。陽。へ。回。り。け。り。

仲達謀殺曹爽

景初三年の正月。魏主曹叡。許昌の殿中。ありける。夜。の。三。更。二。陣。の。陰。風。吹。起。り。側。あり。燈。を。打。滅。ひ。ぐ。も。を。く。哭。哀。音。し。て。先。年。殺。され。毛。皇。后。に。十。人。の。宮。女。を。伴。ひ。來。り。座。辺。に。よ。り。て。命。を。索。む。此。より。ま。の。ま。病。を。ひ。て。一。身。安。





司馬文昭  
 公孫權  
 を討つ





らば日よその危くちのけしむべし劉放孫資二人は樞密院の事務を掌せ武帝の子。燕王曹宇と大將軍を任じて太子曹芳を輔し。曹宇の生れを恭愼温和にして堅く辭し。曹宇は曹叡とあむ。劉放孫資と雜する用ひを議せしむ。二人は曹真が恩を受けて受たりし。其子を勸ん為る答て受けし。燕王及び自ら才淺とまり。此職を辭せ別す。才ある人を扱ひ。曹叡問て曰く。朕が宗族の内たき人より用ひせ。二人答て曰く。曹真の子曹爽の職を任じて。曹叡是より志し。曹宇と本國へ追返す。曹爽を大將軍として。朝廷の政を悉く扱ひ。使を馳し。司馬懿を召し。此と司馬懿は已に遼東に平げ。都とさして。回りけるが途にて。此事

てき。急ぎ許昌に來りて。曹叡を見。曹叡が曰く。朕死せしむ。卿が回を待。今已に逢ふとをゆる。死せしむ。何の恨も有らん。司馬懿頓首して曰く。臣途中より聖体の不安あり。とて兼り。今急ぎ。一とども。兩股を翼ぬき。涙を。幸に龍顏を拝せり。とをゆる。郭皇后太子曹芳。大將軍曹爽。侍中劉放。孫資。ホを床の前より。寄み。司馬懿が手を執り。昔蜀の劉先主。帝城より。病危なり。太子劉禪を孔明に託せし。これより。孔明忠誠を尽し。命を棄て。孤子を扶く。偏邦の人臣ども。猶此のど。況や中國をや。朕が孤子。曹爽。年より。八歳なり。争う。社稷を理む。とをゆる。福を



大尉あり。宗兄あよび元勳の旧臣。伊尹周公の忠を效  
めて。共み孤子と扶へ。宗廟生靈の大幸なり。太子曹  
芳と近くや。よせ司馬仲達へ。朕と違ふ事。今より後。必  
び重く敬へ。といふ。司馬懿も命。ドて。曹芳を抱へ。心んば。  
曹芳をさあつち。司馬懿が頸より付く。手を放さず。曹叡をた  
てて。涙と流し。大尉とく。今日の事とま。いひ。必きと。誤ること勿れ。と  
云けり。司馬懿頓首して。涕泣を。曹叡昏沈し。一言とめ。こ  
い。唯手とり。りて。太子と指し。須臾にして。命終ぬ。在位十三  
年。壽二十六歳。と。又。景初三年正月。下旬。あり。此。又。於て。曹  
爽。司馬懿。まづ。曹芳と。帝位。を。即し。も。曹叡と。高平陵。に。  
華。と。明帝。と。益。し。郭皇后。と。皇太后。と。尊号。し。く。正

始元年と改め。二人内外の政事を。擧ぐ。曹爽。殊。も。司馬懿  
と。敬。と。父。の。と。曹爽。字。の。昭伯。故。大將軍。曹真。が。子。に  
て。乃。ち。魏。主。の。至。親。と。り。始。ち。門。下。の。賓。客。五。百。余。人。あり。  
その内五人へ。と。孝。華。詣。侍。の。もの。あり。と。明。帝。世。も。あり。し  
間。へ。遠。け。く。用。ひ。と。り。ける。が。今。政。事。と。擧。げ。至。り。て。又。尺。指。ひ  
事。の。五。人。と。り。の。何。晏。字。の。平。叔。鄧。颺。字。の。玄。茂。李。勝。字。の。  
公。昭。丁。謚。字。の。彦。靜。畢。軌。字。の。昭。先。と。り。其。外。太。司。農。桓。範。字。の。  
元。則。と。り。の。媚。を。成。く。向。り。從。ひ。共。も。巧。言。令。色。と。り。の。に。  
已。が。富。貴。と。得。ん。と。料。る。何。晏。と。り。の。曹。爽。と。告。て。や。け。る。は。  
軍。兵。を。統。司。る。の。大。權。も。他。人。に。托。し。の。後。も。あ。ら。ん。と。構。  
あ。ら。ん。曹。爽。が。曰。く。我。と。軍。中。の。大。事。を。統。司。る。の。の。仲。達。



ある此人の先帝の皇子として托し入る旧臣をばれん我々の廢  
よ志のびん何晏が曰く。將軍の知し召ぬともゆをんそのを  
御父曹真ハ仲達と共に蜀の敵を破ると兒長安を生む  
し仲達志多り恥を興ぐ。氣を病しめけるより卒  
陣中より逝去り。今將軍あんで之を察しめざる。  
曹爽げももと省てされし。仲達と退けんと計り或曰  
魏主曹芳よりへくやける。司馬仲達久く先朝より事へ  
て功高く徳重し宜く太傅の位を昇せり。曹芳如  
少して自ら主張するに能く宜く料ひると云けり。曹  
爽もあち司馬懿を太傅に進ぐ。天下の兵馬凡く我  
人の下知に従へし。是より弟の曹芳と中領軍と

曹訓を武衛將軍と。曹彦を散騎常侍侍講と。兄  
弟三人御林の軍馬を統督し。あしひす。禁宮を出入せし。又  
何晏。鄧颺。丁謐を尚書とし。畢軌を司隸校尉とし。李勝を  
河南の尹とし。此五人常々曹と扶け。天下の政を議し  
四方の名士をためて門下を授むるもの。叔をあらはし。司馬懿は是  
黨逆をきり。虚病し朝に出む。二人の子も職を辞し。外  
より生じ時を待て。計をたきんと。曹爽をよきより。称禪す  
不ちく。奢る長。毎日何晏。酒を飲ぐ。樂とあり。衣食。花  
血。お朝廷とひき。玩好珍奇の物も。魏主に献ら。作て。  
己が家。貯へ。佳人美女。女を扱ん。府院。あひ。黄門官。衆  
當りのゆ。の。結ひ。け。れば。張當。結ひ。阿り。私。先帝の侍



妾七八人て扱んで曹奩が家を送り。良家の美女五六十人て家樂と。重樓畫閣と建金銀の器皿を造り其栄耀まわむと。の深く易の理を明らむ。人の吉凶を卜ひて結けぬ。鄧賜やける。我毎夜く一きさるる夢をてける幸はトがめん。て。いそぎ管輅たまふ。我毎夜投十疋の青蠅と。来て。鼻の上は落ると夢をてける。吉凶を卜ひて人て云けぬ。何晏も。やける。我亦が相ひ三公と。さるるんき人物ちりや願ひトひの。管輅答て曰く。元愷辨を輔けく。慈惠を宣周公周を佐けく。坐しと且を待たぬ。のへ光と六合を流る。万国を寧す。是をち道と履の休祥ちり。山豈整と。のてトとて用

ひんや。今二公その身侯位は君一と。職山岳よりも重名雷霆の震がごとく。徳を懐の。寡く。威を怖るもの。の衆に殆心と。小ると。翼たる多福の人。はあらん。況や鼻の天中の山高くと危ららば。長く貴と守る所以ちり。今青蠅。鼻よりく。此はあらん。位峻もの。顛り。輕豪ちる者。の亡ぶ。害盈の。豊盛衰の期。あらん。此の。山。地中にあると謙といひ。雷天中にあるを。壯と。謙の多を損す。寡を益す。壯の礼はあらん。行とあるれ。未有損已而不先大。行非而不傷。愚者。はく。二公上の。文王六文の。指と。追下。の。尼。又。象。象の。義と。あらん。然と。く。三公の位と。も。は。幅。証。尽。と。と。一。と。揮。る。ち。く。や。け。れ。ぬ。都。賜。勃。然。と。一。と。い。い。

易經卷之六 管輅 易經卷之六 管輅



りて曰く是老生の常談なり。管輅も二人が用ひざるやと云  
老生の不生と云常談の不談と云ると罵り袖を拂て回り  
れば何晏鄧賜大に笑ひて是まこと狂人なりとぞやける。管  
輅の家を回りてその舅を右の趣きと語れば舅もどろひて  
けろ何晏鄧賜の威勢をあらは盛よして天下の人尽く恐れ  
るあり。汝もあつて無用の言を吐く。二人の言を逆たるぞ管  
輅が曰く我死人と語る何ぞと亦も怖るやとあらん舅駭  
ひて曰く死人との何事ぞ管輅が曰く我鄧賜をえり行歩筋  
不束骨脉不制肉起立傾倚して手足あまき人のぞろろを  
鬼躁の相と号をも何晏の竟不守宅血不華色精爽烟浮  
みして其容枯木のぞろ是を鬼幽の相と名く共々遐福の人

よあらぬ。近き内を粉骨碎身せられ累々あらぬ三族も及ぶ  
我々の故に怖れと云けし聞人々も大に笑ひ狂人なりと  
て朝りて後よごあひ合されたり。曹爽の何晏等と日夜  
酒と飲ぐ遊びけるが氣鬱し煩きとして常々城外に  
出で獵とあそぶ。その弟曹羲とて諫め兄は毎日遊宴と  
の事として威勢をゆるして天下の人を怖しむ長久のそ  
ろいこと有きも況んや城外に出で獵と一か一害と計  
ものありて城内に変わらば後悔ととも及ぶやと云けし  
曹爽怒りて曰く兵権尽く我手の内あり。雑言を計  
ものあらん無用の言を吐く。この哉と気色を損じて吐り  
けし曹羲涙を流して退きけり。何晏ある日曹爽を見



欠

MISSING





婢女

仲達

李勝

司馬蒙休  
李勝



て。今司馬仲達病と号し。久く坐す。君あんどんを付て。虚実を伺ひ。むざる。と云け。曹爽笑めて。量る。の老夫あんどで。道は足んとぞやける。其のち正始十年改めて。嘉平と号し。李勝を荆及びの刺史。封を曹爽の。内外の権ととり。久く仲達が消息をきき。病の虚実をき。あんどんを。ひそる。李勝を呼ぶ。計と教へ。刺史とありて。荆及びへ。趣んと。急き仲達が家へ行。暇乞して。彼が病の体と。よく。えきたま。と云け。本太傳の府中。に到る。門吏。その由を報。し。司馬。その。二人の子とよんで。曰く。是は曹爽。病を。我。又計とあんどんと。冠と卸。髪と乱。床の上

伏く。身は被て。二人の女。扶け抱。李勝をよ。対面。李勝。床の前。再拜。久く太傳。見ること。不料。此のどく。衰の。天子の。某を。荆及びの刺史。封。御暇を。参。油断。守。李勝。曰く。荆及びの刺史。封。并。司馬。懿。笑。曰く。御。及。李勝。曰く。太傳の病。此のどく。左。右の人。答て。曰く。太傳。近。比。耳。聾。て。能。李勝。を。我。硯。と。求。書。付。く。ん。せ。け。れ。司馬。懿。と。て。笑。て。曰く。我



病やまニ犯かかるとして耳みみのうで交まじへと能あたむ。御ご辺へん荆けい及かつに到いたらへ務つとめて  
功こうて立たての身みを保たもつせよとのう手てをのめて口くちを教かむを侍しやく  
婢ひをたち湯ゆを進すすむ司し馬ま懿いとて飲のんで湯ゆ流ながれて襟えりを湿ぬす  
ければ李り勝しょう笑わらひて曰いく。諸しよ人にんを太た傳でんの旧きう風ふう発はぬと云いふが。今  
果たまして此このうじ司し馬ま懿い乃すなち哽うづ噎うづのあ色いろをばはし我われ老らう衰すいして病やまを  
のう。死しをうと目め暮くまあり。二人ふにんの子こ不ふ肖せうなり。御ご辺へんすく教か導だうま  
曹そう将しょう軍ぐん見まえられば千せん方ぽう二人ふにんの子こを頼たのむる由よし傳でんるのうへれといふ  
て。床とこの上うへに倒たふれ伏ふし。色いろ嘶せきひき喘ぜんぐ。李り勝しょう持もつ別べつとこ曹そう爽そう  
が府ふ中ちゆうに到いたり。右みぎのうのうむきを告つげば曹そう爽そう大だい喜きんではの老らう  
父ふあらぬ餘よ氣きあり。形かたち色いろをう離なる乃すなち泉いづみ下したのう人ひとあり我われをう  
のう慮りあらんとぞうける。司し馬ま懿いの李り勝しょうが回まわりたるをてて起たち

上うり。二人ふにんの子こを向むかひてうける。李り勝しょうが病やまのうやうと結むすぶに曹そう  
爽そう再またび我われを疑うたぐに唯ただ何なにもなし彼かが城じやう外がいにい出でて獵うむにあ  
とを計はかむに施ほさんとてはひそうに用もち意いして待まち居いたり。

繪本通俗三國志七編卷之六終

三國志七編卷之六終



122  
74  
28



